



© Yuki Nakase

ウォルトディズニーホールにてArKtype制作の“Triptych (Eyes of One on Another)”ワールド・プレミア公演のドレスリハーサル

トリップティッチ

ロバート・メープルソープの写真は純粹かつ痛々しく、禁止されたいはずな遊びのように人々を誘惑します。3月9日は彼がこの世を去ってからちょうど30年。没30周年の追悼も含め、メープルソープが残した写真100枚とともに伝える音楽劇『トリップティッチ』のコンサート・バージョンがこの春ロサンゼルスLA交響楽団のホームであるウォルトディズニーホールで初演を迎えました。インディーズバンド『ザ・ナショナル』のギタリストでありながらクラシック音楽の作曲家でもあるブライス・デスナー氏の音楽は、心地よい賛美歌のようなメロディと腹の底から絞り出したような力強さの対比が印象的で、まるでメープルソープの写真のようです。

この作品はコーラス隊『ルームフル・オブ・ティース』のために作曲され、2人の男女ソロシンガーと8人のアンサンブル、そして12の楽器から構成されるチェンバーオーケストラによって演奏されます。彼らが生み出す美しい音は、コード・アーリントン・タートル氏のリブレットの中にある一節、「the devil in us all darkness as beauty」のように、善悪が共存する人間そのものを表現しているように聞こえます。今年1月にマサチューセッツ州の現代美術館で行われたワークショップ公演後にそれまでの演出家が降板し、その後1ヶ月かけて今の演出家カネザ・シャル氏が作品を再構成しました。私を含むほとんどのデザイナーと助手は元の演出家の声かけで集まったメンバーなのにも関わらず、短時間で全員の気持ちを汲み取りながらチームをまとめ上げたシャル氏の勇気と包容力と決断力には脱帽です。

音楽劇『トリップティッチ』はX:誕生(SM)、Y:人生(花)、Z:死(黒人)の3幕構成です。パティ・スミスとエセックス・ヘンムフルの詩をもとに再編成されたXとZ、そしてYはメープルソープの個展『パーフェクト・モーメント』における性的表現が卑猥だと訴えられた、1990

年の裁判における記録文書の一部を歌っています。この公演でもメープルソープが撮影した男性のヌード写真を使用しています。照明デザインを請け負うにあたり、これまで浴びるように彼の作品を見てきました。初めのうちは性的な表現を含む写真を長時間直視することに少しためらいを感じましたが、しばらくすると逐語的な解釈が影を潜め、光が浮き上がってきます。究極の黒と白と、その間の滑らかなグレイスケールが完璧な構図をフィルムに焼き付け、なんて素晴らしい光の目をもった芸術家なんだろうと気が付きました。

ウォルトディズニーホールの照明は、ほとんどがクラシック音楽の公演のために仕込みフォーカスされていました。この公演では持ち込み器材はなく、予備として吊られているホールの器材をそのままの位置で使用することが条件でした。約180台のETCソースフォーを自由にフォーカスしてもいいと言われましたが、結果的にこの公演のためにフォーカスして使用したのはソースフォー約40台に加え24台のムービングライト(VL1000ERSとMAC TW1)です。もともと70台ほどフォーカスする予定でしたが、ホール固定のコンサートあかりがとても美しく、30台分のアイデアはホールのデザインをお借りすることになりました。「来年定年を迎え、照明の仕事から引退するんだ」と話すホールの照明デザイナー、テリー氏はとても協力的で、LA交響楽団のためにデザインしたコンサートあかりについて色々ご教示くださいました。照明を通じて出会う優しさに心が打たれます。

カーテンコールはスタンディング・オーバーションでした。大声援を受ける出演者の大きな笑顔が私たち裏方の心も満たしたように思います。私たち『トリップティッチ』チームは、より大掛かりな演出を伴う劇場バージョンの制作のためにミシガン州に移動します。作品はその後ワシントンD.C.とニューヨーク公演を経て全米世界ツアーに向かいます。